

**どうやって'アイデア風船'を定着させるか：『仕事漂流 就職氷河期世代の「働き方」』（稲泉連；2010）の1事例を相手にしたメモ作りの例示**

著者	水野 節夫
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	64
号	4
ページ	11-35
発行年	2018-03
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00021252">http://doi.org/10.15002/00021252</a>

# どうやって‘アイデア風船’を定着させるか

——『仕事漂流 就職氷河期世代の「働き方」』（稲泉連；2010）の  
1 事例を相手にしたメモ作りの例示——

水 野 節 夫

## 【A】はじめに：

- \* 1 ぼくの方法的立場と本稿の位置：
- \* 2 トピックは‘社会学するって何?’：
- \* 3 <Theory and Research>絡みの話：
- \* 4 ぼくの立場=<ボトム・アップ+ $\alpha$ >路線：
- \* 5 いくつかのキーワード：

## 【B】対象事例の紹介：

- \* 1 事例の導入に向けて；
- \* 2 事例の概要について：
  - ・ 1 [い] <大学時代のバイト→最初の仕事>までの経緯：
  - ・ 2 [ろ] 転職絡みの経緯や[は] その他の関連する話題から：

## 【C】事例の検討：《アイデアメモ作りの例示》；

- \* 1 作業局面 1 = 関連データの入れ込み：
- \* 2 作業局面 2 = 関連データへのコメントの入れ込み：
- \* 3 作業局面 3 = <\* 2 >情報を踏まえての小見出しの入れ込み：
- \* 4 作業局面 4 = ‘仕込み’作業の展開：

## 【D】おわりに：

- \* 1 何をやってきたのかの再確認：
  - ・ 1 個別的ミニ・コメント水準でやってきたこと：
  - ・ 2 <Theory and Research>論関連での位置づけ：二重の意味での‘関連キーワード群’の析出；
- \* 2 今後の見通し：

## 【A】はじめに：

### \* 1 ぼくの方法的立場と本稿の位置：

分析の仕方に関するぼく自身の方法上の基本的立場が〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線であり、この路線を体現する基本的分析手法として事例媒介的アプローチ（Case Mediated Approach。別名‘CM法’）があるということ——こうした点については、先に、ぼくのこれからの主要な研究プロジェクト群の見取り図を提示した研究ノートの中で触れておきました（水野〔2016：pp.86-91〕）。そしてその研究ノートの注の中で（pp.87-89）, ‘質的データ分析’の‘講義’と‘フィードバック’と‘実際の訓練’とをセットにして本年度まで行なってきたワークショップ的色彩の強い大学院授業の授業目標に言及する形で質的データ分析の〈内容〉と〈焦点〉などについても紹介しておきました。

それらの内容は、ぼくの質的データ分析への取り組み方の特徴を考える上では重要なところなので、その点を再確認しておくこととなります。ぼくが考える質的データ分析の内容というのは、基本的には、素材群・データ群を色々と検討する作業全体のことであり、より具体的には、素材群・データ群を相手にしながら色々なアイデアを出してきたり、素材群・データ群・アイデア群に見通しを与えたり、それらを腑分け・絞り込み・圧縮・整理などをする作業の総体のことです。そして、質的データ分析を実際はどうやっていくのか、という点に関連づけて言えば、‘主要な分析プロセスやステップに関して大雑把な見通しを提示するという水準’と‘日常的に行なうことが期待されている具体的な分析作業水準’という二重の焦点を持っています。この二重の焦点のうちの2つ目として挙げた‘具体的な分析作業水準’で繰り返し用いているものとして、ぼくが‘使える技法群’ ミニマムと呼んでいるものがあります。《アイデアの風船飛ばし》, 《なぞりとなぞり返し》, 《簡易整理法》の3つがそれです。

本稿では、それら3つの技法群の一つである《アイデアの風船飛ばし》に焦点を絞る形でその‘飛ばし方’を例示的に提示することを——ということは、‘主要な分析プロセスの提示水準’で言うところの分析作業の〈立ち上げ〉局面での試みを——やってみます。

わが社会学部にはずっと以前から‘社会学への招待’というリレー方式でやっている学科入門科目があって、その授業の一環としてここ何年間か‘社会学をするって何?’という共通テーマで学部1年生を主要な聴衆として専任教員が‘顔見世’的に各自の専門の研究分野に関わるトピックで話をするということを行なっています。以下に記すのは、すぐ上でその概略に触れたぼくの方法論（の一端）を、この授業用にアレンジしたものであり、そうした事情もありますので、本稿では、講義風の語り口をそのまま残すことにおきたいと思います。

## \* 2 トピックは‘社会学するって何?’ :

この講義で期待されているトピックは、‘社会学するって何?’ というものです。ぼくとしては、その点にズバリ答えてみるつもりです。今回の話のメインの部分で何をするのか、と言うと、副題にも書いているように、ルポルタージュの一部を相手にして、そこに書かれている内容に刺激される形で、ぼくが‘思いつき’（‘アイデア風船’を飛ばす、と言っていますが）をどういう具合に‘膨らましていったか’、そのプロセスについてお話する、ということになります。（社会学のメイン＝中心的な研究対象である集合的事象の解明・把握・理解のためのキーワードや理論候補絡みで、ですが）<ステップを踏みながら‘アイデア風船’を飛ばしていく過程>、これこそが、‘社会学をする’ということの一つの意味だ、と思っているからです。

もちろん、そういうことだけが‘社会学をする’ということになるわけではありませんが、しかし、相当重要な部分であることは確かで、そこらへんの‘理由づけ’のお話することから始めていきましょう。

## \* 3 <Theory and Research>絡みの話 :

それでは今日の話の背景情報を提供するために、<Theory and Research>絡みの話を簡単におきます。ここで<Theory and Research>と言っているのは‘理論’と‘調査研究’とをどう関連づけるかということです。

君たちは、この‘社会学への招待’という授業の中で、色々な社会学的議論・発想・観点・理論等を耳にしてきたはずですし、社会学部の授業の中でこれからも色々とお勉強をすることになるはずで。

その際に出てくる一つの重要なポイントとして、そうした議論群や理屈群——それをここでは‘理論’と言っているわけですが、そうした‘理論’——をどう実際に活用するのか、活用できるのか、という点があります。そしてその点をめぐる一つの議論脈絡として、理論枠組とデータ候補群 (=素材群) とのすり合わせ・関連づけをめぐる問題というのがあって、社会学の分野では、これを<Theory and Research>という問題領域、テーマ領域と呼んでいるわけです。

## \* 4 ぼくの立場＝<ボトム・アップ+ $\alpha$ >路線 :

ぼくの今日の話は、この‘理論’と‘調査研究’との関連づけ方についてのぼくなりの方の立場の表明をすることになります。この議論脈絡の中でのぼく自身の‘立ち位置’を具体的に言えば、<ボトム・アップ+ $\alpha$ >路線、です。その中でも、事例媒介的アプローチ (Case Mediated Approach ; CM法) というやり方を‘実践’しているので、今回の話は、その議論の一部を披露してみようということです。

ぼくの CM 法においては、‘使える技法群’ ミニマムという言い方で大きく 3 つの主要な手法を準備しているのですが、今日は、そのうちの一つで、‘アイディアの風船飛ばし’の手法と呼んでいるものに関連することをお話します。‘アイディアの風船飛ばし’ というのは、研究者などが研究対象としているターゲット素材などに刺激されて思いついた大小様々なアイディアを思いつくままに出してくることで、これを集団でやる場合には、うまくいっている時の‘ブレイン・ストーミング’が生み出してくるはずのものですし、精神分析で言うところの‘自由連想’と類似したモードでの‘アイディア創出’作業とみなすことができるものです。この手法は、基本的に、何らかの対象に‘刺激’を受けたことを対象化していく際に用いることができるものですから、(ここでは一つの分析手法として紹介していますが、実は)単にそうした調査研究上の手法として活用できるというだけではなく、皆さんがこれから色々な授業とつきあっていく際にも大いに役に立つもの、という具合に考えているものです。

#### \* 5 いくつかのキーワード：

皆さんにぼくの話についてきてほしいので、お互いの共通理解を深めていくためのキーワードをいくつか出しておきます。

それらは、

- ・ 1 社会学
- ・ 2 社会と個人（‘社会の中の個人’ と ‘個人の中の社会’；‘個人状況’論）
- ・ 3 <[い] 視角・観点；[ろ] 関連キーワード群；[は] 素材群>の 3 点セット

です。

それでは、各々、簡単な説明をしておきます。

先ず、〈・ 1 社会学〉について、です。ぼくとしては、狭義と広義との区別をしています。狭義では‘集合’現象について扱うのが‘社会学’。広義には、‘集合的なもの’や‘社会的なもの’‘人間関係的なもの’にも目配りしながら‘人間にまつわる問題’を扱うのが‘社会学’、という具合に考えています。

ちなみに、(ここでは詳しく触れる時間はありませんが)‘社会学的視点’の重要な一角を占めるものとして、‘メカニズム’論的発想がある、という具合に位置づけています (Hedström et al. [1998])。

次は〈・ 2 社会と個人（‘社会の中の個人’ と ‘個人の中の社会’；‘個人状況’論）〉です。

すぐ上で、‘集合的なもの’や‘社会的なもの’‘人間関係的なもの’にも目配りしながら‘人間にまつわる問題’を扱うのが広義の‘社会学’という具合に述べました。この広義の社会学の中では、‘社会と個人’というテーマはメジャーなものです<sup>1</sup>、ぼくの興味関心は、この‘社会と個人’の関係、とりわけ、‘個人’にとっての‘社会’や‘社会的なもの’の意味・意義というところにあります。これを把握していく際のキャッチフレーズとして‘社会の中の個人’と‘個人の中の社会’がある、と言っていいでしょう (バーガー [1963=2017 : pp.111-199])。そして、ぼくがとりわ

け興味の焦点に据えたいと考えているのが、ぼくが‘個人状況’論と呼んでいるテーマ領域です。

ぼくが言う‘個人状況’とは、ある特定の個人（‘その人’という言い方をすることもあります）における【心理；アイデンティティ；実存】の3種類の状況の複合からなる、という具合に考えることにしています。つまり、研究対象として焦点化されるのが、ある具体的な個人に即した場合の‘心理状況’、‘アイデンティティ状況’、‘実存状況’の各々かそれらの複合状態、ということです（水野〔2016：p.92〕）。

要するに、ぼくの興味関心の焦点は、狭義の‘社会学’というよりも、＜社会と個人＞という場合の‘個人’に向けられているということです。

3つ目は〈・3 <〔い〕 視角・観点；〔ろ〕 関連キーワード群；〔は〕 素材群〉の3点セット）です。

まず‘視角・観点’というのは、物事を見ていく場合に分析者の側に備わっている‘視角・観点’、もしくは分析者の側が事実上か意識的に採用する‘視点・観点’のことです。（詳しい説明は省きますが）ぼくたちが事実上こういうものを持っているからこそ、物事が見えてくるということがあります。

次は‘関連キーワード群’。これらは、‘視角・観点’を前提にして対象とする素材群に迫っていく際に鍵になる用語群のことです。

最後は‘素材群’です。これらは、研究テーマとの関連で解き明かそうとしている問題群に迫る際に具体的に取り組む素材群＝データ候補群のことです。

ぼくは先に、ぼくの興味関心の焦点は、狭義の‘社会学’というよりも、＜社会と個人＞という場合の‘個人’、とりわけ‘個人状況’論に向けられている、と言いました。このテーマ領域にどう取り組むか、ということについて、この3点セットを使って説明すれば、次のようになります。

先ず〈・1〉の‘視角・観点’としては、‘個人状況’へのまなざしを挙げることができます。次に〈・2〉の‘関連キーワード群’の具体的な内容は、今のところはっきりしない。最後に〈・3〉の‘素材群’というのが、今回取り上げるルポルタージュとその内容です。

そして実は、今回は、〈・1〉の‘個人状況’へのまなざしという視角をベースにしながら、〈・3〉のルポルタージュという素材群、データ群を使って、〈・3〉で今のところはっきりしないとやっている具体的な内容を埋める作業——より正確に言えば、‘関連キーワード群’の候補を生み出してくるというプロセスを、その手の内を見せながら例示的にやっていく作業——をやってみようとしているのです。

---

<sup>1</sup> 最近では、‘構造とエージェンシー（Structure and Agency）’といった論じられ方もしています。ぼくとしては、とりわけM・アーチャーというイギリスの社会学者の非常に息の長い一連の議論（Archer〔1995；1996；2000〕）に注目していますが、彼女は、‘構造’と‘文化’と‘エージェンシー’とそれら3者の間の複雑な相互影響関係に注目しつつ、それらの契機が時間的経過の中で創発的に生み出してくる構造的・傾向的諸帰結やその多様な波及効果の理論的解明を行なっています。

## 【B】対象事例の紹介：

### \* 1 事例の導入に向けて；

それでは、ここで扱う事例について次の二つの仕方で導入を行なっていきましょう。一つは、稲泉連という人の『仕事漂流 就職氷河期世代の「働き方」』（2010）という本自体の内容の簡単な紹介。これは、<まえがき>情報、次いで<目次>情報の紹介という形でやっていきます。もう一つは、この事例自体の概略の紹介。こちらについては、事例対象者の仕事絡みでの‘個人状況’の特徴を照らし出す観点から、時間軸に沿って仕事上の節目を再確認する形で行ないます。

今日取り上げるのは先の本の第2章で取り上げられている中村友香子さんの事例です。

まずは、今日取り上げる事例が入っている著作の概要について、「まえがき」情報から押さえておくことにします。

「まえがき」（pp.6-7）での著者の文章を使いながら本書の概要を紹介しておきましょう。稲泉氏は、こういう具合に述べています。

《本書は「転職」という一つの切り口から、八人の「働く若者」取材したノンフィクションである。

彼らはみな一九七九年生まれの僕と同世代で、いわゆる「良い大学から良い就職」を成し遂げた。一九九〇年代中頃から二〇〇〇年代前半にかけて——「就職氷河期」に企業社会への第一歩を踏み出し、「ロストジェネレーション」と呼ばれるようになった彼ら…》（p.6）；

《かつて1人の大学生だった彼らは、いまという時代にどのように企業組織の中で働き始め、そして働く自分自身の思いにどう折り合いをつけ、1人の「社会人」として成長を遂げていったのか。…》（p.7）；

要するに、大きくは次の4つの特徴を述べていることになります。

一つ目は、「転職」という切り口《本書は「転職」という一つの切り口から、八人の「働く若者」を取材したノンフィクションである》（p.6）です。

二つ目は、1979年生まれ取材者と同世代の8人の「働く若者」——しかも、著者の表現に従えば《いわゆる「良い大学から良い就職」を成し遂げた》（p.6）若者たち——が研究の対象だということ。

三つ目は、1990年代中頃から2000年代前半＝「就職氷河期」に企業社会に入っていった人々だったということです。

そして、4つ目は、本書が、そういった彼ら・彼女らの‘想い’に寄り添いながら、彼らのいまの時代の中でどのようにして《1人の「社会人」として〔の〕成長》を遂げていったのかを、その肉声を聴き出す形で明らかにしよう、という試み《かつて1人の大学生だった彼らは、いまという時

代にどのように企業組織の中で働き始め、そして働く自分自身の思いにどう折り合いをつけ、1人の「社会人」として成長を遂げていったのか。…》(p.7) だということです。

次は、目次情報からの著作の概要の紹介です。

本書は8章構成になっていて、各章が1人の若者の軌跡を描き出す、という形のもので。この点を目次で簡単に見てみると、例えば、＜第1章 長い長いトンネルの中にいるような気がした(都市銀行→証券会社 大橋寛隆 (33))＞とか＜第2章 私の「できること」って、いったい何だろう(菓子メーカー→中堅食品会社 中村友香子 (30))＞、といった具合になっていることが見て取れます。

そこで、転職の観点——つまり、どういう会社からどういう会社などへと転職していったのか、という観点——から、後の6人についても簡単に紹介しておく、

[3] <中堅 IT 企業→人材紹介会社> ;

[4] <大手電機会社→大手電機会社> ;

[5] <中堅広告代理店→大手広告代理店> ;

[6] <大手総合商社→IT ベンチャー> ;

[7] <経済産業省→IT ベンチャー役員→タイルメーカー役員> ;

[8] <外資系コンサルティング会社→外資系コンサルティング会社→MBA 留学> ;

というものです。

## \*2 事例の概要について：

それでは、対象とする事例の概要の話をしていきます。今回取り上げるのは、すでに先で触れたように、第2章の中村友香子さんの事例で、「目次」では＜第2章 私の「できること」って、いったい何だろう(菓子メーカー→中堅食品会社 中村友香子 (30))＞となっているものです。

以下、次のような2つのステップを踏んでこの事例の概要を見ておくことにします。

ステップ1は大学時代以降の仕事の変遷です。大きくは、＜大学時代からのバイトの仕事→卒業後についた菓子メーカーでの最初の仕事→次の仕事は中堅食品会社での仕事＞となります。

この変遷を、より細かく言えば、

[1] 大学2年生からやっていた総菜屋チェーンでのバイトの仕事(本能的に《面白かったのは在庫管理の仕事》(p.58)),

[2] ‘菓子メーカー’での最初の仕事というのは、《駅やデパートなどで土産物の洋菓子を売る小売店グループ》(p.68)での販売の仕事のことです。

[3] 次の‘中堅食品会社’とは、《氷菓子を主に取り扱う…会社〔で、〕戦後すぐに設立された業界の老舗》(p.89)での仕事です。

次は、ステップ2です。ここでは、

[い] <大学時代のバイト→最初の仕事>までの経緯と、

〔ろ〕 転職絡みの経緯や〔は〕 その他の関連する話題  
について簡単に紹介していくことにしましょう。

・ 1 〔い〕 <大学時代のバイト→最初の仕事>までの経緯：

彼女の場合際立っているのは、彼女が<大学を4年で卒業→最初の仕事>という普通世間一般で想定されている大学生の典型的なルートではなく、<大学を6年で卒業→最初の仕事>となっているところです。つまり、彼女は、《「やりたいこと」はあるけれど、望んだ就職先は見つからない》 (p.61) というので、2留していたのです。どうしてそういうことになったのか、その点をより詳しく見てみるために、ここでは、大学時代の就職についての考え方・取り組み方の特徴と、彼女の仕事への意欲・抱負を見ておくことにします。

先に、大学2年生から総菜屋チェーンでのバイトの仕事をやっていた、と言いましたが、このバイトはまさに副次的なバイトで、大学時代、将来の仕事として彼女が本当にやりたかったのは実は出版の仕事でした。彼女は《早稲田大学文学部卒、2度の留年をしてまで出版社を目指し》(p.56) していたのです。

《出版社で本を作りたい——もともとそう思って東京の大学に入った彼女は、〔大学時代にすでに〕大学外の就職活動サークルに所属してい》(p.59) て、本人的には将来就きたい仕事を目指して、着々と手を打っていたのです。彼女が入ったのは、《1990年代に業界研究をテーマにつくられたサークルで、エントリーシートや小論文などをみなで書いたり読み合ったりする》(pp.59-60)、そうしたサークルで、将来の就職に向けて準備態勢を整えていたのです。しかし、「就職氷河期」の真ただ中にあったという時代的な事情もあって、そうした努力もむなしく、彼女は（そして実を言うと彼女だけでなくサークルの仲間たちも）出版業界での内定がもらえない状況——《「やりたいこと」はあるけれど、望んだ就職先は見つからない》(p.61) 状況——にあったのです。

そうした中、彼女は仕事の的にも気持ち的にも《総菜屋チェーンでのアルバイトに向かっていった》(p.61) のですが、そうした方向に彼女を心理的に突き動かした事情について、彼女は2つの興味深い‘種明かし’的発言をしてくれています。一つは、《就職をせずにフリーターになったからといって、それほど生活が困るというわけでもないじゃないか——現に正社員になれないのは私だけではないのだ》 (p.62) というもの。もう一つは、《バイトをしていると就活のことを忘れられるし、お店では店長よりもキャリアが長かったので勝手も分かっているんです。うまくいかない就職活動に比べたら、アルバイトのほうがずっと居心地もいいし、やりがいも感じられたんです》 (p.62) という発言です。後に【C】で見ると、ぼくはこれら2つの発言に注目してぼくなりの‘アイディアの風船飛ばし’をすることになります。

それはともかく、《結局、彼女は以後の2年間という時間をアルバイトに明け暮れ、3度の就職活動を行なうことになった》(p.62) のです。

彼女は就職留年を2年していたわけですが、《1年が経ち、そして2年が経ち、彼女は出版社に

入りたいという気持ちを抱いたまま、就職先が決まることなく卒業を迎えることにな》(p.63) ります。もちろん、一方で総菜屋チェーンでのバイトをやり続けながら、なのですが。

《「2年間の就職活動に失敗した中で、アルバイトの体験ならまだ胸を張って面接で言えるし、働くなればそれを活かそうと考えたんです。で、いつかは店舗の店長になったり、全体を取り仕切る立場になったりしたい、って》(p.67)。この‘いつかは店舗の店長になったり、全体を取り仕切る立場になったりしたい’ という考えは、実は彼女が総菜屋チェーンのバイト先で事実上やっていたことの延長線上にあったものだったと言っていいようです。

こうした問題意識の下、《彼女は食品の小売に業種を絞り、正社員を募集している企業を探し始めた。「とらば一ゆ」を見ていると、その片隅に駅やデパートなどで土産物の洋菓子を売る小売店グループの求人が目に飛び込んでき》(p.68) ます。

《「いずれは店舗の運営にかかわる仕事がしたいです」

そう彼女が話すと、人事担当者は言った。

「戦力になってほしい」》(p.69)

こうしてこの洋菓子の会社に就職することになります。

## ・ 2 [ろ] 転職絡みの経緯や [は] その他の関連する話題から：

ここではあまり詳しく触れませんが、＜最初の仕事→次の仕事＞までの経緯の中には、

[ろ1] 最初の職場での仕事の仕方と雰囲気、

[ろ2] 《「あんたなんか使えないんだから！」》(p.74) というバイトの人への厳しい叱責の言葉や売れ残りの商品を家に持って帰らざるをえないという惨めな仕組みなどを含めた) ‘最初の仕事’ の場でのいくつかのマイナスのエピソードの連続とズタズタの毎日、

[ろ3] その帰結としての北九州市の実家への‘逃避行’と退社、

[ろ4] その後の(転職の)コンサルを通しての仕事観の相対化と、

[ろ5] 大学の就職課を通しての新しい仕事の場の紹介を通しての2つ目の会社との出会いなど、触れておくべきことはいくつもあります。

さらには、以上の転職絡みでの経緯に関わる情報以外にも、

[は1] (母の仕事振りや‘鍵っ子’の思い出を含めて) 彼女の仕事観の源泉についての話題や、

[は2] 仕事に賭ける彼女の思い=このままでは終われない(‘東京でまだ何もしていない’；自分としての踏ん切りのつけ方絡みか)、

[は3] 第2の仕事場での仕事への取り組みと仕事観の変遷などのテーマも注目には値するのではないかと、思っています。

ここでは【C】で‘アイデア風船’を飛ばす関係で注目することになる個所に限定して、背景情情的な説明をしておくことにします。それらは、仕事観の源泉への言及がある [は1]、仕事へ

の思い入れに関連のある〔は2〕、職場の雰囲気絡みで〔は3〕と〔ろ1〕の3つ（もしくは4つ）です。

#### 彼女の仕事観の源泉としての母親の働きぶりの影響（→〔は1〕）：

後に【C】で着目するのは「働くことのイメージ」の原点という発想で、ぼく個人としては、‘仕事観の生成’という主題との関連では理論的展開力を予感させてくれそうな興味深い観点ではないか、と考えているものです。この発想自体は、中村さんのものというよりも、インタビューアーである稲泉氏の分析上の切り込み方——つまり、インタビューを通して中村さんの働き方の特徴を浮き彫りにするために彼女に寄り添いながら伴走している稲泉氏の切り込み方——なのですが、中村さんの生活史に即して言えば、この発想に関連する（と言うよりも、影響を与えている）のは、彼女の母親自身の働きぶりです。幼かった頃の中村さんは、教師としての母親が自宅でいかにも楽しそうに打ち込んでいるその姿が意味するもの——まさに稲泉氏が「働くことのイメージ」と定式化しているもの——を尊敬の念をもって受けとめ継承しているのです。彼女が大学時代出版の仕事にこだわっていた個人的・生活史的事情は、このエピソードを踏まえれば、了解の度合を増すことになるはずです。

#### 仕事に賭ける彼女の思い（→〔は2〕）：

次にぼくが注目するのは、<‘東京でまだ何もしていない’>という彼女の言葉です。この発言は、彼女が洋菓子メーカーでの初めの職場での仕事上の重圧に押しつぶされてしまった結果、故郷への（故郷での）逃避行を続けている非常にしんどい人生局面で表明されたものです。家族など傍から見ると限りでは、そのまま九州の方で職について出直した方がベター・現実的に見えた可能性がありますが、しかし、彼女にとっては、そういう選択肢は考え難かったのでしょう。彼女の場合、‘このままでは終われない’という気持ちに踏ん切りをつけるためには、何としても東京で出直すしかない、という気持ちが非常に強かったことがわかります。その人その人の人生の中では、このように本人にしかわからない事態、精神状況が見られるということがあつたものなのだ、ということだと思えます。

#### 職場の雰囲気（→〔は3〕と〔ろ1〕）：

仕事のしやすさ＝働きやすさを大きく左右する事情の一つとして非常に重要なものに職場の雰囲気というものがあると言っていいでしょう。中村さんの事例の中にも、大きく2種類の職場の雰囲気を見て取ることができます。【C】では、職場の雰囲気を生成させてくる会社の事情・条件に着目して、そのヴァリエーションについて触れることになるのですが、ここでは、どういった雰囲気が見られるかについて確認しておきましょう。

1つ目は、初めの洋菓子メーカーでの職場の雰囲気です。この関連で見ておきたいのは、この最初の職場を支配していた仕事の仕方と（そうした仕事の仕方を体現している店長が作り出してくる）職

場の雰囲気です。

《彼女がこの洋菓子メーカーに就職し、百貨店の食品売り場で働き始めたのは、2004年11月、クリスマスシーズンから正月に繋がる忙しい時期》(p.70)でした。

《最初の1ヶ月間、彼女はがむしゃらに働き続けた。八時半に出社する朝番の日でも——アルバイト店員は18時に帰ってしまうが——社員は20時頃まで店に残るのが常だった。遅番の日は14時から業務が終わるまで店舗に入る……この閉店業務は早くても22時、遅いときは終電に乗り遅れそうになることもあった。休みは週に1日あるかないかであった。》(p.71)

こうしたペースで仕事をしながら、彼女は、バイト時代の仕事の仕方との大きな違いを思い知らされることになります。

《とりわけ違和感を覚えたのは、形の崩れたケーキや割れたクッキー、賞味期限の半月前には廃棄処分にする「御進物」商品の取り扱い方だった。以前のバイト先では、ロス率を厳しくチェックして報告し、どんなごまかしも利かない仕組みになっていた。だが、この会社にはどこか「売り上げさえよければそれで構わない」といういい加減さがあった。店舗の女性店長は全店で売り上げが1位の「カリスマ店長」だったが、彼女は形崩れたケーキをポケットマネーで買い、それを売り上げに計上してしまうことがあった。

店長は怒ると恐ろしく、商品を落としたりしようものなら厳しい叱責があった。…具体的にそう指示されるわけではないものの、部下である社員たちもそれを購入しないわけにはいかない、という雰囲気が形づくられていくのだった。》(pp.71-72)

もう一つは、第2の職場でのもので、そこでは、《非上場で商材も安定的なシェアを保っているからか、社内全体にはどこかのんびりした、アットホームな雰囲気があるという》(p.89)ほどの違いが見られたのです。

以上で仕事絡みでの中村さんの個人状況のいくつかの特徴の紹介と‘アイデアの風船飛ばし’の例示に用いるくだりが出てくる事情についての説明を終えることにします。

### 【C】事例の検討：《アイデアメモ作りの例示》；

ここでは、ぼくがこの事例から実際どういう具合にアイデアメモを多段的に作っていったのかをお見せすることにします<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> 本稿の狙いは、読み手に‘アイデアの風船飛ばし’という作業の具体的なイメージを持ってもらうことにあるので、ここではその点に説明の焦点を絞っていることをお断りしておきます。

CM法で分析作業を進めていく場合には、基本的には‘なぞりとなぞり返し’と‘アイデアの風船飛ばし’を言わば‘車の両輪’のように駆使しながら多段的に行なうことが基本であり、通常は、‘アイデアの風船飛ばし’の作業に取りかかる前かその作業と平行して‘なぞりとなぞり返し’の作業をかなり丁寧かつ徹底的に行なうということをやっています。今回の場合、すぐ前の【B】での紹介・説明がこの‘なぞりとなぞり返し’の作業の成果を踏まえたものと言っていいでしょう。

‘アイデアの風船飛ばし’というのは、研究者などが研究対象としているターゲット素材などに刺激されて思いついた大小様々なアイデアを思いつくままに出してやることであるという点については先に触れました。では、ぼくはこの事例を相手にしてどういう具合にその作業をやっていたのでしょうか。

‘アイデアメモ作り’に向かったの実際の作業は大きくは次の4局面からなっています。それらは、

局面1 = 関連データの入れ込み；

局面2 = 関連データへのコメントの入れ込み；

局面3 = 局面2 情報を踏まえての小見出しの入れ込み；

局面4 = ‘仕込み’作業の展開；

の4つです。

以下では、中村さんの事例に即して、その具体的な作業内容を説明していくことにします。

#### **\*1 作業局面1 = 関連データの入れ込み：**

‘アイデアの風船飛ばし’をやると言っても、研究者や分析者がどこでもいつでも勝手にできるというものではありません。研究者や分析者を何らかの形で‘刺激してくれるきっかけ’となるものの存在を前提にしての話なのです。つまり、‘アイデアの風船飛ばし’が成立するためには、プラスであれマイナスであれ、あるいは、理論的にであれ体験的にであれ、問題のくだりに出くわした研究者や分析者を様々な意味で‘刺激’してくれる何か、分析者が‘引っかかったり’何らかの‘反応’をせざるをえない対象、研究者や分析者が思わず知らず‘何か口を挟みたくなる’ようなコメント対象を、あらかじめ特定化しておく必要があります。ここで‘関連データの入れ込み’と言っているのは、そうした‘アイデアの風船飛ばし’の対象となるくだりを入れ込んでくる作業のことで、これが‘アイデアメモ作り’の作業局面1にあたります。

表1には中村さんの事例のうちぼくが注目した6つのくだりが<《 》( )>の形式で(《 》の中に引用箇所を、それに続く( )には該当の頁を入れ込む形で)書き込まれています。それらの引用箇所が‘アイデア風船飛ばし’の対象となるものです。

**表1 <(アイデアメモ作りの) 作業局面1 = 関連データの入れ込み>**

#1 《就職をせずにフリーターになったからといって、それほど生活が困るというわけでもないじゃないか——現に正社員になれないのは私だけではないのだ、と。/こうして自らの選択を理屈づけていくとき、…》(p.62)；

#2 《うまくいかない就職活動に比べたら、アルバイトのほうがずっと居心地もいいし、やりがいも感じられたんです。》(p.62)；

# 3 《自らの持つ「働くことのイメージ」の原点》(p.81)；

# 4 《〈私はまだ東京で何もしていない。大学もいまいちで、やりたかった仕事にも就けず、就職してもきついバイトを3ヶ月続けたようなもので、ぜんぜんだめだった…〉》(p.84)；

# 5 《非上場で商材も安定的なシェアを保っているからか、社内全体にはどこかのんびりした、アットホームな雰囲気があるという》(p.89)；

# 6 《前の私は、自分がどうなるかしか考えられなかったんです。…いまは、…いま自分が辞めたら会社がどうなるか、…》(pp.95-96)；

表1の最後の〈#6〉のくだりを除いて、なぜぼくがそれらの個所に着目したいのかという点については、先に【B】である程度の事情説明を行ないましたが、ここでは表1の各々のくだりについて（再確認的に）簡単な補足説明をしておきます。

# 1 《就職をせずにフリーターになったからといって、それほど生活が困るというわけでもないじゃないか——現に正社員になれないのは私だけではないのだ、と。/こうして自らの選択を理屈づけていくとき、…》(p.62)；

# 2 《うまくいかない就職活動に比べたら、アルバイトのほうがずっと居心地もいいし、やりがいも感じられたんです。》(p.62)；

これらは、大学時代の就職活動がうまくいかず、バイトを続けながら留年するという路線に踏み出す局面で、本人自身を納得させるという流れの中で出てくるもの、本人の実感的見解を表明したものと言っていいでしょう。

# 3 《自らの持つ「働くことのイメージ」の原点》(p.81)；

このワーディング自体は、本人のもの、というよりも、ルポルタージュの書き手である稲泉氏が使っているものです。ぼくとしてもこの「働くことのイメージ」の原点という着眼点は面白いと思うので、書き出したわけです。

# 4 《〈私はまだ東京で何もしていない。大学もいまいちで、やりたかった仕事にも就けず、就職してもきついバイトを3ヶ月続けたようなもので、ぜんぜんだめだった…〉》(p.84)；

これは、最初の仕事をやめざるをえない状況に追い込まれてしまい、北九州の実家に引っ込んでいた時期、しかも母からはもう東京ではなく九州の方で職探しをした方がいいのでは、と言われ始めていた時点での彼女なりの中間総括の言葉、という具合に位置づけることができるでしょう。

# 5 《非上場で商材も安定的なシェアを保っているからか、社内全体にはどこかのんびりした、アットホームな雰囲気があるという》(p.89)；

これは二つ目の仕事の職場の雰囲気についての彼女の言葉です。

# 6 《前の私は、自分がどうなるかしか考えられなかったんです。…いまは、…いま自分が辞めたら会社がどうなるか、…》(pp.95-96)；

これは、稲泉氏の眼からすると、第2の職場での仕事にもかなり慣れて、《以前よりも、ずっと

自信に満ちた顔つきになっているように》(p.95) 思われた時点での久々のインタビューの際の言葉 (このインタビューは3年間にわたると述べています)。彼女は、今や《「主任」の肩書を得て部署を異動し、他の営業部の受発注などを管理する仕事を任されるようになって》(p.95) していたようです。

## \* 2 作業局面2 = (上記) 関連データへのコメントの入れ込み :

関連データを入れ込んだ後から、研究者は本格的に‘アイデアの風船飛ばし’に取りかかることとなります。この作業局面2で行なうのが‘関連データへのコメントの入れ込み’です。表2を見ていただければわかりますが、表1で説明した《 》( ) 以降にぼくのコメントが入っています。例えば、

【#1 《就職をせずにフリーターになったからといって、それほど生活が困るというわけでもないじゃないか——現に正社員になれないのは私だけではないのだ、と。/こうして自らの選択を理屈づけていくとこ…》(p.62) ; 〈自らの選択の理屈づけ〉の視点・発想が面白い ; いつ、どういう事情の際に、この発想を作動させ始めるのだろうか。またいつ、‘理屈づけ’をしていると気づくことになるのか ; 】

とか、

【#2 《うまくいかない就職活動に比べたら、アルバイトのほうがずっと居心地もいいし、やりがいも感じられたんです。》(p.62) ; <#1>の〈自らの選択の理屈づけ〉と連動もしくは、これを補強する〈思考→情動〉過程としての比較の発想 ; 比較思考の心理的帰結、ということでしょう ; 】

といった具合に、です。このやり方で、#3から#6までについてもコメントの入れ込みを行なっていくと、表2のようになります。

### 表2 <(アイディアメモ作りの) 作業局面2 = 関連データへのコメントの入れ込み>

#1 《就職をせずにフリーターになったからといって、それほど生活が困るというわけでもないじゃないか——現に正社員になれないのは私だけではないのだ、と。/こうして自らの選択を理屈づけていくとき、…》(p.62) ; 〈自らの選択の理屈づけ〉の視点・発想が面白い ; いつ、どういう事情の際に、この発想を作動させ始めるのだろうか。またいつ、‘理屈づけ’をしていると気づくことになるのか ;

#2 《うまくいかない就職活動に比べたら、アルバイトのほうがずっと居心地もいいし、やりがいも感じられたんです。》(p.62) ; <#1>の〈自らの選択の理屈づけ〉と連動もしくは(これを)補強する〈思考→情動〉過程としての比較の発想 ; 比較思考の心理的帰結、ということでしょう ;

#3 《自らの持つ「働くことのイメージ」の原点》(p.81) ; この<「働くことのイメージ」

の原点>に注目するという視座は使えるはず；ぼくたちは、どういった「働くことのイメージ」を持っているのか。またそのイメージを作り出した‘原点’は何か。どういう事情からそのイメージは生成することになったのか。一旦そのイメージが生成してくるとどういう諸帰結がうみだされてくることになるのか、等々；

#4 《私はまだ東京で何もしていない。大学もいまいちで、やりたかった仕事にも就けず、就職してもきついバイトを3ヶ月続けたようなもので、ぜんぜんだめだった…》(p.84)；周りの人間たちには、なぜそこまで東京にこだわるのか、と思われるかもしれないが（言い換えると、本人にしかわからない感覚だろうが）、彼女としては、(結果的に)‘東京で、言わば勝負をしてきていた’ことになり、そのことが、このせりふ=思いを生み出している、と言えるはず。ある**心理的サイクル**が閉じるためには、そのサイクルを閉じらせることになる、あるところまでは続けてやっていると、本人には‘完結’感が生じないということの具体例。類似の心理的論理は、彼女の《出版社という職種への強いこだわり》(p.83)との‘つきあい方=対処の仕方’についても作動しておかしくないはず。逆に言うと、このこだわりから‘脱出’できるためには、そうした‘こだわり’や(こだわりの生み出す)‘心理的サイクル’を打ち壊すor軌道修正させていくことを促すだけの‘認識上の飛躍’を生み出すだけの‘何か’ (=何らかの事情や事件)が介入してくる必要がある、ということでもある；<Xへの強いこだわり>の論理= <‘こだわり’は心理的サイクルを生み出してくる>；

#5 《[い] 非上場で[ろ] 商材も安定的なシェアを保っているからか、社内全体にはどこかのんびりした、アットホームな雰囲気があるという》(p.89)；[い]の非上場企業であるということに加えて、[ろ]の業界内での安定的シェアという事情が、競争的企業環境に身を置かなくてもやっつけられる仕組み作りには貢献していることは確か。企業間競争の度合の違いが、‘のんびりした雰囲気’を創るか、逆に‘ぎすぎすした雰囲気’を生み出すかを決めてくる、大枠的な(=企業環境的な)変数、ということでしょう、多分；<何が職場の雰囲気を生み出してくるのか>；職場を束ねる職場長(例：課長)のリーダーシップ[事例3の「理想の上司」の例]。職場へのノルマのプレッシャー[事例1の‘ノルマ重圧の連鎖’]。企業間競争の度合[事例2の‘非上場で安定的シェア’]。職場構成員の相互作用。職場構造のタイプ[事例1の‘ヒエラルヒー型’か、それとも‘フラットな集団型’か]。職場コミュニケーションのタイプ[事例4に両方出てくる‘頼れるのは己1人’型か‘職場での意見交流=和気あいあい’型か]。その他に何がある??；

#6 《前の私は、自分がどうなるかしか考えられなかったんです。…いまは、…いま自分が辞めたら会社がどうなるか、…》(pp.95-96)；働き方を考える二つの回路。<自分がどうなるか>と<会社(集団；組織)がどうなるか>；‘自分’中心主義と‘会社’中心主義と‘会社’配慮(=目配り)主義；》

ここで作業局面2での作業の仕方に関連して注目しておきたいのは次の3点です。

一つ目は、研究者が対象とする関連データと真正面から向きあう中でその対象から‘刺激’され

たこと、‘引っかかった’ことを、思いつくままに書き出してくることが基本だということ。要するに‘自由連想モード’で思いつくままに書き出してくればいいのです。

二つ目は、(一点目の帰結と考えていいでしょうが) そのように刺激を与えてくれるくんだり絡みで自由にコメントを出してくるので、場合によっては、初めのコメントと次のコメントが矛盾し合ったり、相互の関連性がなくバラバラだったりすることが大いにありうるし、それでいいのだということです。

三つめは、このコメントの入れ込み方は研究者や分析者のクセが非常に出てきやすいところで、その人その人でやり方はかなりの違いがあるのではないかと考えています(し、これまた、それでいいのだ、というのが、ぼくの見解です)。繰り返しになりますが、ここでの作業の基本モードは、その人その人が各々創意工夫を発揮して自由に思いつくことを思いつくままに書き出してくればよいということなのです。ですから、(思いつくままに自由に、と言われても) 非常に慎重な人はじっくり考えながらやるでしょうし、何か思いついたことを素直に出していくのが好きな人はそのスタイルでやるでしょう。また理論的思考・志向の強い人は理論的に、また理屈をこねるのが好きな人はそのやり方で、文章化を行なっていくものと思います<sup>3</sup>。

### \* 3 作業局面3 = <\* 2>情報を踏まえての小見出しの入れ込み：

表3では、【自らの選択の理屈づけ】、【比較思考とその帰結】、【「働くことのイメージ」の原点’ という視座】といった具合に小見出しがつけてありますが、これらは<\* 2>を見ながら、後から付けたものです。

表3 <(アイディアメモ作りの) 作業局面3 = 表2を踏まえての小見出しの入れ込み>

# 1 【自らの選択の理屈づけ】：《就職をせずにフリーターになったからといって、それほど生活が困るというわけでもないじゃないか——現に正社員になれないのは私だけではないのだ、

---

<sup>3</sup> この3点目に関連して言えば、ぼくが今回お見せしているコメントの入れ込みは、基本的に‘思いつきモードの産物’であることは確かなのですが、(しかし、思いついたことをその場その場で‘一気に吐き出している’というよりも)、‘思いついた内容’を、‘個人状況’の特徴把握にとってヒントになるかもしれないという論点に関連づける方向で、思いつきの内容を何度となく反芻し‘寝かしこんだ’段階で——ということつまり、個人の行動と心理のありように関するぼく自身の理論的興味関心に繋げる形で、ということになりますが——コメントの書き込みを開始したという事情もあって、コメント内容はそれなりに‘練り上げられた’という印象を与えるところがあるかもしれません。しかしながら、この局面2での作業モードということ言えば、そうしたコメントとしての‘まとめり’の度合などを気にすることなく、言わば自分の‘思いの丈’をバラバラに書き出していくというモードで書き進めることがあっても構わない、ということなのです。

と。/こうして自らの選択を理屈づけていくとき、…》(p.62)；〈自らの選択の理屈づけ〉の視点・発想が面白い；いつ、どういう事情の際に、この発想を作動させ始めるのだろうか。またいつ、‘理屈づけ’をしていると気づくことになるのか；

#2 【比較思考とその帰結】：《うまくいかない就職活動に比べたら、アルバイトのほうがずっと居心地もいいし、やりがいも感じられたんです。》(p.62)；<・1>の〈自らの選択の理屈づけ〉と連動もしくは（これを）補強する〈思考→情動〉過程としての比較の発想；比較思考の心理的帰結、ということでしょう；

#3 【‘働くことのイメージ’の原点’という視座】：《自らの持つ「働くことのイメージ」の原点》(p.81)；この〈「働くことのイメージ」の原点〉に注目するという視座は使えるはず；ぼくたちは、どういった「働くことのイメージ」を持っているのか。またそのイメージを作り出した‘原点’は何か。どういう事情からそのイメージは生成することになったのか。一旦そのイメージが生成してくるとどういふ諸帰結がうみだされてくることになるのか、等々；

#4 【こだわりの論理】：《私はまだ東京で何もしていない。大学もいまいちで、やりたかった仕事にも就けず、就職してもきついバイトを3ヶ月続けたようなもので、ぜんぜんだめだった…》(p.84)；周りの人間たちには、なぜそこまで東京にこだわるのか、と思われるかもしれないが（言い換えると、本人にしかわからない感覚だろうが）、彼女としては、（結果的に）‘東京で、言わば勝負をしてきていた’ことになり、そのことが、このせりふ=思いを生み出している、と言えるはず。ある心理的サイクルが閉じるためには、そのサイクルを閉じらせることになる、あるところまでは続けてやっていかないと、本人には‘完結’感を生じないということの具体例。類似の心理的論理は、彼女の《出版社という職種への強いこだわり》(p.83)との‘つきあい方=対処の仕方’についても作動しておかしくないはず。逆に言うと、このこだわりから‘脱出’できるためには、そうした‘こだわり’や（こだわりの生み出す）‘心理的サイクル’を打ち壊すor軌道修正させていくことを促すだけの‘認識上の飛躍’を生み出すだけの‘何か’（=何らかの事情や事件）が介入してくる必要がある、ということでもある；〈Xへの強いこだわり〉の論理=〈‘こだわり’は心理的サイクルを生み出してくる〉；

#5 【職場の雰囲気を生成させてくる会社の事情・条件】：《[い] 非上場で [ろ] 商材も安定的なシェアを保っているからか、社内全体にはどこかのんびりした、アットホームな雰囲気があるという》(p.89)；[い]の非上場企業であるということに加えて、[ろ]の業界内での安定的シェアという事情が、競争的企業環境に身を置かなくてもやっていける仕組み作りにも貢献していることは確か。企業間競争の度合の違いが、‘のんびりした雰囲気’を創るか、逆に‘ぎすぎすした雰囲気’を生み出すかを決めてくる、大枠的な（=企業環境的な）変数、ということでしょう、多分；〈何が職場の雰囲気を生み出してくるのか〉；職場を束ねる職場長（例：課長）のリーダーシップ〔事例3の「理想の上司」の例〕。職場へのノルマのプレッシャー〔事例1の‘ノルマ重圧の連鎖’〕。企業間競争の度合〔事例2の‘非上場で安定的シェア’〕。職場構成員の相互作用。職場構造のタイプ〔事例1の‘ヒエラルヒー型’か、それとも‘フラットな集団型’か〕。職場コミュニケーション

ンのタイプ〔事例4に両方出てくる‘頼れるのは己1人’型か‘職場での意見交流＝和気あいあい’型か〕。その他に何がある??;

#6 【働くことの意味 or 働き方についての考え方2つ (or 3つ?)】:《前の私は、自分がどうなるかしか考えられなかったんです。…いまは、…いま自分が辞めたら会社がどうなるか、…》(pp.95-96); 働き方を考える二つの回路。〈自分がどうなるか〉と〈会社(集団; 組織)がどうなるか〉; ‘自分’中心主義と‘会社’中心主義と‘会社’配慮(=目配り)主義;》

これらの小見出しを眺めただけでは、簡単なことをしているように見えるかもしれません。単にテキストの中からキーワード候補を見つけ出してくるということをやっているように見えるでしょうから。もちろん、実際にはそういう作業もやってはいるのですが、しかし実は、〈\*2〉をやった後に〈\*3〉に取りかかるというところが‘ミソ’なのです。つまりここでの重要なポイントは、色々書きこんでおいた上で‘後から小見出しをつけていく’という作業のやり方にあるのです。というのも、そのやり方を採用することによって、あまり無理をしないモードで概念化作業を研究者がやっていくことを可能にしているという意味で、分析作業的観点から言えば、それなりに‘画的’なことだからです。このやり方が、いかに概念化作業を促進しやすいかという点については、逆の場合を考えてみればわかってくるはずです。つまり、自分が理論的コメントを加えたいテキストやそのテキストが体现している現象があったとして、その現象に対して(〈\*2〉でやったような形で自由に思索をめぐらしながら概念化に向けてのウォーミングアップ作業をすることなく)いきなり概念レベルで名前を付けようとした場合を想定してみれば、このやり方がいかに容易かつ——ここが分析作業を行なっていく当事者にとっては重要なところなのですが——(心理的に言って)‘自然’な作業モードかということを実感することができるはずです。

その点を、〈‘語ること’と‘書くこと’との大きな違い〉と〈思いついたことの要点を書きとめるという作業の複雑さ〉という二つの観点から補足説明しておきましょう。

まずは、〈‘語ること’と‘書くこと’との大きな違い〉から。今ここで、自分が概念的に把握したい事象があったとして、それを口頭で行なう場合と文章化する形で行なう場合を考えてみてください。口をついて出てくるというのは、少なくとも心理的にはかなり‘自然’と思われる確率が高いのですが、他方、同じことを文章として定着させようとする時には、口をついて出る場合と比べるとどうしても(心理的な)‘自然さ’の度合は低くならざるをえないはずです。これは、文章化の場合には、文章として意味を成すものへと‘構成’‘構築’していくということ自体にそれ相応のエネルギーを注がざるをえない事情が介在してくるからなのです。他方、‘しゃべってしまう’方は、‘ついつい口をついて出てきてしまう’という側面があるので、それをそのまま書き留めたとすると、(思索結果やプロセスを文章として練り上げていく場合に比べて、思考としての)‘緻密さ’という点では劣ることがあったとしても、(予感的、実感的に)自分には何か言いたいことやメッセージがある場合には、曲りなりにでも、それは語りだされた結果の中に埋め込まれている可能性が大きいということになります。これが〈‘語ること’と‘書くこと’との大きな違い〉です。聞き

手を相手にして語る場合には、読み手を念頭に置きながら書く場合に比べて、構造的・傾向的に、より多くのことを生み出してくる傾向があるのは、実はこういう事情があるからです。

もう一つは、「思いついたことの要点を書きとめるという作業の複雑さ」です。‘思いついたことを自由に定着させる’というのは、すでに一つの作業です。そして定着させた内容を相手にしてその要点は何かという点をあれこれ検討すること自体も一つの作業です。そして、その結果を踏まえて定着内容の要点をまとめあげるというのも、これまた一つの作業なのです。つまり、この理屈でいけば、アイデアを吐き出し、その要点を書きとめるという場合には、少なくとも同時に3つの作業を行なっていることになるはずなのです。

この関連で言えば、一度に行なう作業はなるべく単純な方がいいのです（これを「一度に一つ（one at a time）」の原則）と呼んでいます。この観点からすれば、＜\*2＞と＜\*3＞とを分離させて作業を行なうということにはかなりの合理性があるということになります。

というのも、＜\*2＞の作業が狙っているのは、自分の思っていること・考えていることをなるべく自由に定着させるということなのに対して、＜\*3＞の作業の狙いが‘小見出し作り’——つまり、＜\*2＞という形で対象化・文章化されたものを、（場合によってはじっくりと反芻もしくは内省する場合も含めて）改めて読み直しながら、そこから＜\*2＞の内容にふさわしいと思われる‘小見出し’を考え出してくる作業——にあるからです。

以上要するに、研究者が調査現場で直面する現象をどういう具合に概念化していくか、という問題とも関連していることですが、必ずしも＜\*2＞から自動的に＜\*3＞が出てきているわけではないという点を押さえておくことが大切なポイントとなります。社会学の分野などで鍵になる概念やカテゴリーをどういう具合に析出してくるか、という作業課題があるのですが、この【＜\*1＞→＜\*2＞→＜\*3＞】という形で作業を進めるやり方を身につけておけば、この一見すると悩ましい問題もそれほど悩まなくても対処できる可能性が出てくるはずなのです。

#### \*4 <(アイデアメモ作りの) 作業局面4 = ‘仕込み’ 作業の展開> :

それでは今度は、第3局面でやってきた作業の延長線上で、さらに理論的アイデアを膨らませるということをやってみましょう。表4を見てください。

表4 <(アイデアメモ作りの) 作業局面4 = ‘仕込み’ 作業の展開例>  
(上記の<#3 【‘働くことのイメージ’の原点’ という視座】>を使っの例示)

#3 【‘働くことのイメージ’の原点’ という視座】:《自らの持つ「働くことのイメージ」の原点》(p.81) ; この<「働くことのイメージ」の原点>に注目するという視座は使えるはず; ぼくたちは、どういった「働くことのイメージ」を持っているのか。またそのイメージを作り出した‘原点’は何か。どういう事情からそのイメージは生成することになったのか。一旦そのイメージ

が生成してくるとどういう諸帰結がうみだされてくることになるのか、等々；

#3a ‘自己イメージ’論をメカニズム論的観点から展開すること：

『働くことのイメージ』の強さ・弱さとその効果の問題群があるでしょう。；「働くことのイメージ」そのものというよりも、そのイメージを自画像＝自己のアイデンティティ（あるいはそうした意味での「自己イメージ」〔《学生時代に想像した自己イメージ》(p.206；第5章の事例)〕)との関連でどう位置づけているか、また位置づけられるかどうか、という点が、ここでの注目点。そうしたイメージが一定以上の強さになってくると、例えば(すぐ上の<表3>の中の) <#4>で触れたような形での‘こだわりの論理’を生み出してはくはず。この‘こだわりの論理’が生成してくると、これはもうそれなりの自律性を持ったメカニズムとなって作動し始めると見ていいはず。また‘こだわりの論理’は本人の在り方・働き方にとってプラス・マイナスの両義的な可能性を持っているということが出来るだろう。‘こだわっているが故に融通が利かない’対‘こだわっているからこそ一貫性が出てくる’という形での両義性；

#3b ‘強さ’‘弱さ’の軸と‘硬さ’‘柔らかさ’の軸(その1)：

‘強さ’‘弱さ’という言い方の他に、‘硬さ’‘柔らかさ’〔<この表現自体で行くと、‘硬い’方が‘評価的にダメ’というニュアンスが入り込んでくるようにも思うが、ここでより大切なのは、メカニズム論的観点から見た場合の‘硬さ’‘柔らかさ’各々の特性の析出なのだろう〕という言い方もできるでしょうね。；

#3c ‘強さ’‘弱さ’の軸と‘硬さ’‘柔らかさ’の軸(その2) = 4つのボックス(=論理的可能性)と3つの経験的可能性 = 【<イメージの焦点化(硬質型)>；<イメージの焦点化(柔軟型)>；<イメージの拡散化)>】；

‘強さ’/‘弱さ’の軸と‘硬さ’/‘柔らかさ’の軸とを交差させれば、論理的には【[い]‘強く’+‘硬い’；[ろ]‘強く’+‘柔らかい’；[は]‘弱く’+‘硬い’；[に]‘弱く’+‘柔らかい’】の4つのボックスができる。これらのうち、実際にありうるのは[い]と[ろ]でしょう。‘弱さ’が邪魔をして、「自己イメージ」は‘硬さ’‘柔らかさ’を云々する水準以前にあるはずなので、[は]と[に]のケースは出てこないはずだから。その意味では、先ずは「自己イメージ」が‘強い’か‘弱い’かが第1の分岐点で、‘強い’場合は<イメージの焦点化>が、‘弱い’場合は<イメージの拡散化>が、各々、生起する、と考えられる。そして、‘強い’場合は、さらに<イメージの焦点化>のサブタイプとして、<イメージの焦点化(硬質型)>と<イメージの焦点化(柔軟型)>とを区別できることになるはず。これが第2の分岐点と言えるもの。この両者を分かつ上では何が(どういった事情が)決定的に重要なのだろうか？ 本人の資質？ ‘打たれ強さ’？ ‘自己相対化’能力・発想の有無？ 自己モニタリング能力？ 基本的に‘本人’要因？ それとも環境要因の影響/環境要因が入り込む余地など、はあるのか？ ‘硬さ’の文化・雰囲気と‘柔らかさ’の文化・雰囲気、といったものを想定できる？；理屈的には、<‘こだわっているからこそ一貫性が出てくる’>と同時に‘こだわっているが故に融通が利かない’>のが、<イメージの焦点化(硬質型)>、<‘こだわっているからこそ一貫性が出てくる’>が‘こだわっているが故に融通が利かない’とい

うわけではない>が<イメージの焦点化(柔軟型)>ということになるはずなのだが、果たしてこういう具合に分かれてくるのかどうか…。;

‘仕込み’作業のさらなる展開，ということ言えば，色々なことが可能でしょうが，ここでは，<（‘メカニズム論的観点’と呼んでいる側面に関心のある）ぼくが実際にやったものとしてはこんなものがありました>ということ，上記の<\*3 【‘働くことのイメージ’の原点’という視座】>を使って例示的に示してあります。最初の5行にわたる文章に続けて，<#3a><#3b><#3c>という形で思索を重ねた結果を書き込んだものです。

なお，‘仕込み’作業の展開というのは，基本的に小見出しの入れ込みをした後に行なう作業と言っていいものですが，場合によっては，（表3の【こだわりの論理】絡みの仮説的見解や<職場の雰囲気の種類>論絡みでの様々な事例の小括的入れ込みといった作業のように）小見出しの入れ込みへと繋げていく途中で行なう様々な仮説的・暫定的な思索の試みも含めておいた方がいいのかもしれません。

それでは，最後に《アイデアメモ作りの例示》という形でやってきていることを，ぼくが実際にやっている具体的な分析の仕方の基本線を説明する際に用いている枠組みを使って再確認しておきたいと思います。

ここで念頭に置いているのは《名前づけ前(pre-naming)→名前づけ(naming)→名前づけ後(post-naming)》という枠組みです（水野[2016:p.89]）。この枠組みを用いて言えば，作業局面2でやっていること（＝関連データへのコメントの入れ込み）が‘pre-naming’局面での作業，作業局面3でやっていること（＝小見出しの入れ込み）が‘naming’局面での作業，そして，作業局面4でやっていること（＝‘仕込み’作業の展開）が‘post-naming’局面での作業ということになります。

ちなみに，CM法でとりわけ重視しているのが‘pre-naming’局面での作業であることは，すでに強調しておいた通りです。そして，（ここでその詳細を紹介できないのが残念ですが）‘naming’と‘post-naming’局面になると，（ストラウス氏が言うところの軸足コード化[axial coding]の発想と手法も含めて）ストラウス版GTの手法がその本領を発揮してくれることになるという具合に考えています（Strauss[1987]）。

#### [D] おわりに：

##### \*1 何をやってきたのかの再確認：

【C】では一体何をやってきていたのでしょうか。直接的には，順を追ってアイデアメモを作り上げていくプロセスの説明を行なっていたわけですが，そうした中で，とりわけ作業局面3や作業局面4においては，‘小見出し’を考えだしてくるということを通して，素材群の中から‘概念的アイデア候補’を引き出してくる，ということをやっていたと言っていいでしょう（ちなみに，

これらの‘概念的アイディア候補’というのは、【A】の‘いくつかのキーワード’の個所で用いた用語で言えば、‘関連キーワード群’の候補ということになります)。そしてこの作業自体が、‘社会学をやって何?’という問いに対するぼくなりやの答えと言えるものです。なぜそう言えるのか、という点について、最後に説明して今日の話を終えることにします。

イントロでは、‘社会学って何?’に対してこう答えておきました。〈狭義では‘集合’現象について扱うのが‘社会学’。広義には、‘集合的なもの’や‘社会的なもの’‘人間関係的なもの’にも目配りしながら‘人間にまつわる問題’を扱うのが‘社会学’〉という具合に、です。そして多くの興味関心の焦点は〈社会と個人〉という場合の‘個人’にあって、それを‘個人状況’論という形で展開しようとしている、と述べました。この議論の関連で、〈ぼくが言う‘個人状況’とは、ある特定の個人(‘その人’という言い方をすることもあります)における【心理; アイデンティティ; 実存】の3種類の状況の複合からなる、という具合に考えることにしたい。つまり、研究対象として焦点化されるのが、‘心理状況’、‘アイデンティティ状況’、‘実存状況’の各々かそれらの複合状態、ということだ〉と言いました。

#### ・ 1 個別的ミニ・コメント水準でやってきたこと :

こうした点を踏まえて、ぼくが今回やってきたこと——もっと言えば、ぼく自身が【C】で行なった個別的ミニ・コメントでは、どういうことをしてきたのか、そのこと——の意味を再確認しておきましょう。

共通しているのは、対象とする素材の中にすでに‘埋め込まれているもの’に着目してこれを大いに活用してきた、ということです。

その中身をより細かく挙げていきますと、次のように5つになるかと思います。

第1は、(素材であるテキストに見られる)‘言い回しを概念的アイディア候補としてそのまま採用’’というやり方です。こちらが興味を持っている内容もしくは発想等を体現した言い回しはデータの中にすでに顔をのぞかせているという判断の下、その言い回しをそのまま採用してくるということです。例えば、#1での【**自らの選択の理屈づけ**】(これは、〈意志決定についての後からの理屈づけ・正当化の思考〉と見なすことができるでしょう)や、#3の【**「働くことのイメージ」の原点という視座**】(これはこれでテキストの中ですでに語られているもので、その発想の理論的展開力を予感して‘視座’という形で定式化・対象化したに過ぎません。ちなみに、この発想は結果的に‘自己イメージ’論へと接続・展開していくことになるのですが)がこれに当たります。

第2は、(素材であるテキストに見られる)‘実質的な視点の抽出’です。#6の小見出しである【**働くことの意味もしくは働き方についての考え方2つ**】がその例です。#6で注目した《前の私は、自分がどうなるかしか考えられなかったんです。…いまは、…いま自分が辞めたら会社がどうなるか、…》という発言には、メモにも書きこんでおいたように、実質上、〈自分がどうなるか〉と〈会社(集団; 組織)がどうなるか〉という、働き方についての非常に対照的な2つの考え方が表明

されており、そうした意味で、働き方を考える際の（‘個人状況’論絡みでさらに踏み込んで言えば、＜生き方＞の1構成要素としての＜働き方＞を考える際の）二つのありうる回路を示唆しているということができるものです。

第3は、（素材の中に）‘埋め込まれている’視点を‘微妙に膨らませてみる’というもの。#2の【比較思考とその帰結】や<思考→情動>の連鎖への着目＝心理的傾向性の析出に関連>がそれで、データに見られる‘比較思考’を再確認した後、その‘心理的帰結’に注目すると共に（ここまでは第2点目の‘実質的な視点の抽出’路線と言っていいでしょう）、‘心理的帰結’の内実を、人間行動と人間心理に関するべく自身の暫定的な理論枠組みを事実上動員してくる形で‘<思考→情動>の連鎖’とか‘心理的傾向性’といった発想で解釈する方向に、ほんの少しですが、踏み出しているのです。

第4は、（素材の中に）‘埋め込まれている’視点を‘構造的に膨らませてみる’というやり方です。#5で行なった【職場の雰囲気生成させてくる会事的事情・条件】への着目がそれで、データ内にある‘職場の雰囲気’情報を踏まえて、それとは別の‘職場の雰囲気’の可能性を色々考える方向に議論を展開できるように、＜何が職場の雰囲気を生み出してくるのか＞という問いを投げかけながら、稲泉氏の著作の中に出てくる他の事例をも動員してくる形で仕事面での環境条件の特徴の析出を開始しています。

そして第5は、（素材の解釈を通して）キーワードを作り出すやり方です。#4の【こだわりの論理】がそれに当たります。そこでは、＜私はまだ東京で何もしていない＞という彼女の‘セリフ’に着目し、なぜ彼女がこの人生局面でこの‘セリフ’を吐くのか、について、仮説的に分析者の側の読み・解釈を入れ込み、それを、その時点での東京での仕事に対してだけでなく、大学生時代における出版業界へのこだわりとも結びつける形で＜彼女が様々な意味での‘こだわり’を見せているのだ＞と考えています。その上で【こだわりの論理】の含意について考えをめぐらしているのです。

## ・2 <Theory and Research>論関連での位置づけ：二重の意味での‘関連キーワード群’の析出；

<Theory and Research>論関連での位置づけということ言えば、どういうことが言えるでしょうか。

イントロでは、<Theory and Research>の議論脈絡では、<[い]（素材群への）視角（の設定）；[ろ] 関連キーワード群（の析出）；[は] 素材群とのつきあい方（の基本スタンス）>の3点セットが重要という指摘を行なっておきました。

この指摘を踏まえて、先ず [い]（素材群への）視角について言えば、研究者や分析者がどういう観点を持っているか（ぼくの場合には‘個人状況’に迫りたいという興味関心がこれに当たります）、が非常に大切だということがあります。なぜかと言うと、研究者や分析者が持っている観点・視点の

関数として素材群が意味を帯びてくる、という事情があるからです。

次に、本稿で中心的にやってきた〔ろ〕関連キーワード群の析出に当たっては、どういう具合にして〔い〕の（素材群への）視角を分節化的に把握していくかという調査研究の流れの中で関連キーワード群が意味を持ってくるようになるわけですが、ここで注意を喚起しておきたいのは次の点です。

それは、ここで言う‘関連キーワード群’には、（素材群への）視角との関連で重要な意味を帯びてくるキーワード群、つまり（視角）関連キーワード群と、対象として取り上げる素材群との関連で重要なものとして浮かび上がってくるキーワード群、つまり（素材）関連キーワード群の2種類があるということです。ここで力説しておきたいのは、どういった事態に‘関連があるのか’、関連性の向かう先（‘視角’なのか‘素材’なのか）の違いによって、二重の意味での関連キーワード群、を区別することができるということです。この両者の繋げ方がうまい具合にできるかどうか、が、調査研究上の大なる課題と言っているもので、<素材群を相手にした場合どういった（素材）関連キーワード群を出してこれるか、そしてそれらを（視角）関連キーワード群として磨きをかけていけるか>、そのやり方（の端緒）を今回は試論的にやって見せたわけです。

関連キーワード群の析出に当たっては、もちろん、別の回路もありえるでしょう。例えば、古典のお勉強を通して、とか、関連分野でのキー概念群や理論群の動員などといった形で、です。それらは‘上からかぶせてくるやり方’ = ‘トップ・ダウン型’のアプローチです<sup>4</sup>。他方、ぼくがここでやったのは、‘ボトム・アップ型’のアプローチ = ‘下からすり合わせるやり方’です。それをどういう具合にやるか、をやってみたわけです。というわけで、この講義のテーマとの関連で言えば、<‘関連キーワード群’と見なすことができる概念的アイディア群を出してることが、社会学をするって何？ に対する答え>ということになるのです。

## \* 2 今後の見通し：

それでは最後に、理論構築論との関連での本稿の位置づけについて簡単に触れる形で本稿を終えることにしたいと思います。

---

<sup>4</sup> 本稿では‘トップ・ダウン型’のアプローチの本格的検討を行なうつもりがないので、このアプローチに関わる細かい議論には立ち入りませんが、1点だけ、‘上からかぶせてくるやり方’を行なう際に動員してきやすい‘当て嵌め’の論理に内在する（とぼくには思われる）構造的欠陥に触れておきます。それは、‘当て嵌め’の論理は研究者が思いついた理論的アイディアや有望そうなカテゴリーを‘素材群’側の事情を考慮することなく、勝手に押しつけてくるという意味で、研究対象とする‘素材群’側の事情を構造的に組み込めないという基本的特徴を持っているということです。これは、〔は〕素材群とのつきあい方との関連で言えば、素材群と関連キーワード群との‘適合性’をどうやって保証するかという重要な問題に関連するもので、この論点に関して、本稿では、‘すり合わせ’の論理の大切さを一貫して主張してきたわけです。

先に【A】では本稿が‘主要な分析プロセスの提示水準’で言うところの分析作業の〈立ち上げ〉局面での試みであると述べておいたわけですが、この発言の含意は、‘ボトム・アップ+ $\alpha$ ’路線での理論化・理論構築論の場合、理論化に向けての分析作業には〈立ち上げ〉・〈展開〉・〈統合〉の3局面があって、その中での本稿の位置は、〈立ち上げ〉局面での成果の例示であったということです。実を言うと、事例研究論の理論的検討をやり始めていて（水野〔2017〕）、そうした議論脈絡で言えば、これから関連文献のさらなる渉猟とその知見等の吸収・継承に向けて、ある程度の時間をかけて‘仕込み作業’をしていかなければならないと考えているのですが、どういう作業をしたらいいいのか、という点に関してはそれなりの見通しが立ってはいるのです。予告的にその焦点だけに触れておけば、——今回の〈立ち上げ〉局面での作業を踏まえて、ということになりますが——〈展開〉局面の成果の例示としては‘事例を束ねていく理論枠組や解釈枠組’の検討と提示についての議論を、また〈統合〉局面の例示としてはアーチャーの‘modes of reflexivity’論の検討（Archer〔2003〕）を考えています。

《関連文献一覧》

- Archer, Margaret S., 1995, *Realist Social Theory: The Morphogenetic Approach*, Cambridge University Press.
- Archer, Margaret S., 1996(1988), *Culture and Agency: The Place of Culture in Social Theory* (Revised Edition), Cambridge University Press.
- Archer, Margaret S., 2000, *Being Human: The Problem of Agency*, Cambridge University Press.
- Archer, Margaret S., 2003, *Structure, Agency and the Internal Conversation*, Cambridge University Press.
- ピーター・L・バーガー著, 1963=2017, 『社会学への招待』, 水野節夫・村山研一共訳, ちくま学芸文庫。
- Hedström, Peter & Swedberg, Richard (eds.), 1998, *Social Mechanisms: An Analytical Approach to Social Theory*, Cambridge University Press.
- 稲泉 連, 2010, 『仕事漂流——就職氷河期世代の「働き方」——』, プレジデント社。
- 水野節夫, 1999, 「ドイツ在住のトルコ女性の変容体験——自伝的語りのインタビューへの事例媒介的アプローチ——」, 『社会志林』(法政大学社会学部紀要), 第46巻, 第1号, pp.65-85。
- 水野節夫, 2000, 『事例分析への挑戦』, 東信堂。
- 水野節夫, 2016, 「〈個人状況(X篇)〉論の展開に向けて——その見取り図の提示——」, 『社会志林』(法政大学社会学部紀要), 第63巻, 第3号, pp.79-107。
- 水野節夫, 2017, 「事例研究の可能性を探る」, 『看護研究』, 第50巻, 第5号, pp.447-454。
- Strauss, Anselm, L., 1987, *Qualitative Analysis for Social Scientists*, Cambridge University Press.